

# 特集 有害鳥獣対策



皆さんは「有害鳥獣」と聞いて、どんな動物が浮かびますか？

町内には  
ツキノワグマ、  
ニホンザル、  
イノシシ、  
ハクビシンなど  
さまざまな動物が生息しています。

「有害鳥獣」と呼ばれる動物が  
人里でたびたび  
目撃されるようになったのは  
なぜでしょうか。

また、町内での被害発生状況は  
どのようになっているのでしょうか。

今月号では、野生動物からの  
被害の現状や対策の取り組みなどを  
紹介します。

## 人々の生活と野生動物 の関わり

古くから人々は野生動物とさまざまな関わりをもって生活してきました。本町に今も伝わる民話にも野生動物が登場する物語が数多く残っています。例えば「クマになった権現さま」の話では、鉄砲の腕にうぬぼれた猟師がツキノワグマ（以下、クマ）の姿となった吾妻権現から注意を受けるやりとりが語り継がれています。

里山に囲まれた農村では、日常的に野生動物による被害に直

面してきました。現在では日本庭園などで見かける「ししおとし」もそもそもはシカよけだったと言われています。人々はこのような工夫を凝らしながら、野生動物との共存を図ってきました。

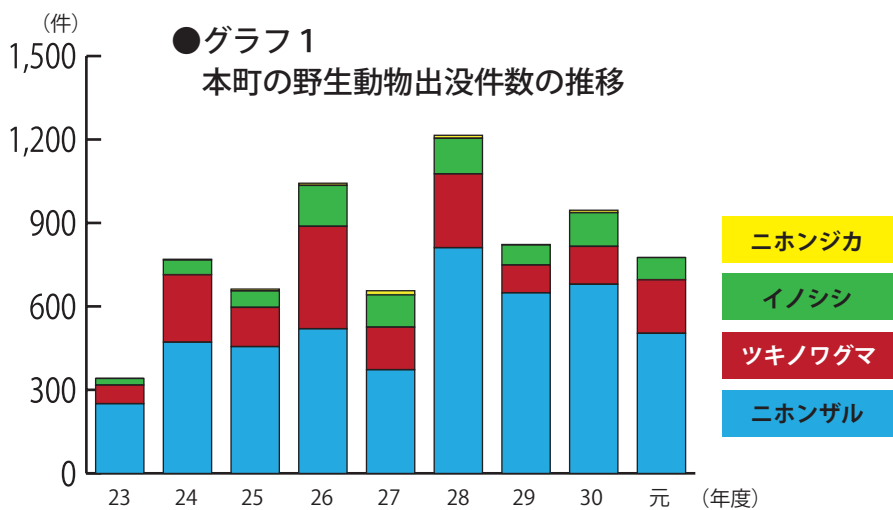
特に東北地方では「マタギ」と呼ばれる狩猟者が多く存在し、山の恵みに感謝しながら、野生動物を捕獲して生計を立てていました。本町においても山野に入り、クマ狩りをしていた様子が猪苗代町史「民俗編」に記されています。狩猟は、里山に暮らす人々にとって身近なものでした。

## さまざまな環境の変化 が及ぼす影響

かつては、野生動物にとって人間は脅威であり、人々の生活圏と野生動物の行動範囲の境界線が自然に引かれ、野生動物が人里へ出没することはまれでした。動物の生息数も高い捕獲圧や厳冬期による自然死などにより現在ののような個体数の増加は見られませんでした。

近年、農林業従事者の減少や狩猟者の高齢化などの影響により、山間部で仕事をする人が減少しています。また、地球温暖化などの気候の変化によって冬の自然死数が以前よりも減少傾向にあり、ニホンジカ（以下、シカ）やイノシシなど特定の野生動物が著しく個体数を増加させていると考えられています。

さらには、中山間地域における過疎化や耕作放棄地の増加が目立つようになり、野生動物が以前よりも出没しやすい環境に変化しつつあります。その結果、野生動物の従来の生息域と私たちが暮らす集落との境界線がなくなってきています。このようなさまざまな要因が複合的に絡み合い、都市部や平野部にまで野生動物が出没するようになってきたと考えられています。



無人カメラで撮影したイノシシ（上戸）



農作物への被害の現状

国の平成20年度の調査では、野生動物による農作物の被害面積は約10万ヘクタールに及ぶという結果でした。東京都の約半分の面積に匹敵する田畑が被害に遭っていることになります。

被害量はおよそ49万トン。米どころとして知られる新潟県の米の年間生産量が約63万トンであることを考えると、被害量も決して少なくありません。被害金額は199億円に及びます。平成30年度における本町の被害金額は164万円、全国合計では157億7740万円に上ります。

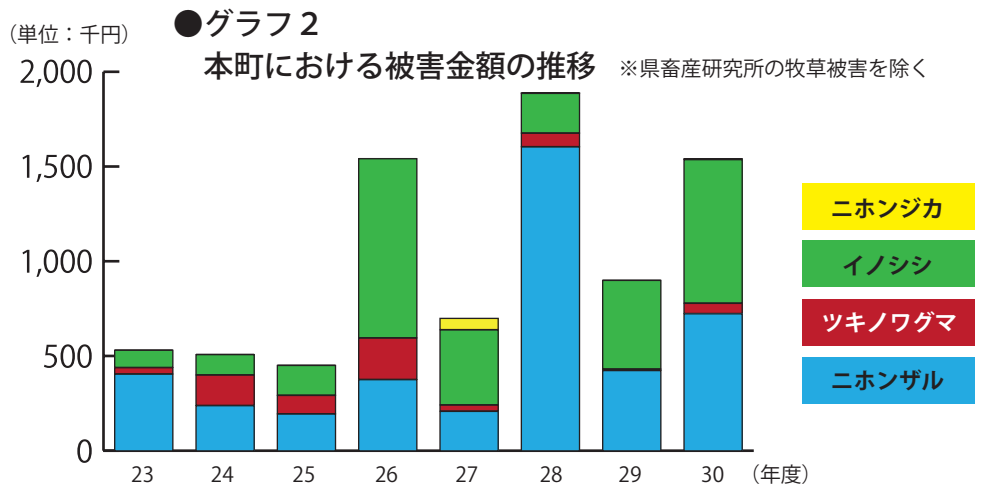
全国に目を向けると、主に農作物に被害を与えている獣類はシカとイノシシが抜きんで多く、次にニホンザル（以下、サル）、ハクビシン、クマとなっています。福島県ではイノシシによる被害が最も多く、次いでサルとなっており、本町においてはサルとイノシシによる被害が多く発生しています。

また県外では、飼育放棄されて野生化したアライグマによる被害も報告されていて、カラスやカモの被害も深刻です。

本町では、追い払いや侵入防止柵などを設置して被害防止に

努めています。適正に管理や対策を行っている集落では被害の減少が見られていますが、町全体の被害激減には至っていないのが現状です。

本町における有害鳥獣による農作物の被害状況は、左の「グラフ2」のとおりです。



地域の力を合わせて



神 郁男さん(白津)

白津地区では平成24年の秋、面積にして約1000坪ものソバがイノシシになぎ倒される被害に遭いました。このことがきっかけとなり、集落全体で対策に取り組むこととなりました。翌25年には「中山間地域等直接支払交付金」を活用して、集落の山側約2・5キロメートルに電気柵を初めて設置しました。

この頃からサルによる被害も頻繁に出るようになっていました。そこで、私たちが住む地域で何ができるのかを集落のみんなで話し合いました。そして、外部講師を呼んで研修会を開いてどのような対策が効果的なのかを学んできたんです。

白津地区の特徴的な取り組みの一つとして、地区の組織体制の中に「鳥獣害対策係」があります。隊長以下約10人が所属し

ていて、区長や地域の人たちと連絡を取り合いながら、地区周辺の見回りやサル追いをしています。サルが出た場合は火花を使つて山の上まで追い払っています。追い払いを数年間続けてきた効果もあって、サルによる被害はほとんどなくなりました。

クマやイノシシの被害を軽減するために電気柵の設置が有効ですが、電気柵はしっかりと管理することが大事なんです。電線に下草や折れた枝がかかって漏電しないよう、毎週日曜日の朝に当番の人が電気柵の見回りや刈り払いを行って日誌をつけ、次の当番の人に申し送りをしています。クマは集落の中に暗い茂みや耕作放棄地などがあると潜みやすくなりますので、このような場所をみんなで協力してなくすようにしています。また、小中学生の通学路もあるので、子どもたちの安全を最優先で考えています。今では県や他の地域からの視察を受け入れるほどになりました。

私は「電気柵に触れると危ないから動物たちは山さ帰れ」と心の中で祈っています。少子高齢化が進む中で地域の取り組みを続けることは大変なことです。が、有害になり得る鳥獣を保護するためにも、地域の力を合わせて取り組んでいきたいです。

町有害鳥獣駆除隊

皆さんは町の「有害鳥獣駆除隊」をご存じですか？

有害鳥獣駆除隊は町から委嘱された14人で構成され、被害報告を受けた際や人身被害の恐れがある緊急事態に出動し、わなの設置や散弾銃での直接捕獲などを行っています。

有害鳥獣駆除隊の皆さんは、仕事を持つかわら、町民の皆さんの被害を少しでも減少させるため、使命感をもって活動にあたっています。

写真1\_町役場で行われた委嘱状交付式に出席した有害鳥獣駆除隊の皆さん 2\_山の斜面にイノシシを捕獲するためのくくりわなを設置する駆除隊員 3\_イノシシのくくりわなを設置したことを示す注意看板。このような看板を見かけたら、付近には近づかないようお願いします



自分たちの集落は自分たちで守る

平成28年に見祢集落周辺の農地にイノシシが侵入し、水田の畦畔が大規模に破壊されました。同じ頃、集落の内部にクマが入り込み、子どもたちの通学や普段の生活の安全を確保することが難しくなり、集落全体で対策を実施することとなりました。

平成29年の春、「多面的機能支払交付金」を活用して総延長2・7キロメートルの電気柵を設置しました。現在では集落を囲むように約5キロメートルにわたって設置し、月に1回程度、集落全体で見回りや草刈りなどの管理をしています。

Interview

集落の話し合いの中で「電気柵や追い払いの火花などで集落を守るだけではいつかはやられてしまう」との声が上がり、集落営農法人である「農事組合法



不作付け地の刈り払いを行う見祢地区の皆さん

人結乃村農楽団」内に鳥獣対策班をつくり、希望者を募って狩猟免許や銃の所持許可などを取得してもらいました。今は5人の若者が鳥獣対策班のメンバーとして活動していて、冬季の狩猟期間に鳥獣の調査や狩猟活動を行い、それ以外の期間は対策の訓練や研究をしています。

これからはドローンやICT技術などを活用した対策も行いたいと考えています。将来的には他の地域の対策のお手伝いもできればと思います。

「自分たちの住んでいる集落は自分たちで守る」を基本に、地域一丸となって対策に取り組んでいきたいです。



町農林課に配属されている  
3人の専門職員に業務の内容や  
今後の対策について聞きました飯田 優貴 (いいた ゆうき)  
町の対策に従事して10年。  
有害鳥獣対策業務を統括

— 東北地方や県内で発生している被害の特徴は？

飯田

これまで、東北地方ではクマとサルによる被害が多く出ていました。時代をさかのぼると、江戸時代から明治時代にはイノシシが日本全土に生息していました。その後、昭和の中頃までマタギ文化が盛んだったため、東北地方ではイノシシをとりつくしたという状況でした。クマに関してもマタギ文化により山の恵みに感謝しながら人々が生計を立てていました。

近年、西日本や関東で被害が出ているイノシシやシカが再度東北地方全体に広がりつつあります。狩猟者の減少や中山間地

農林課 主査 飯田 優貴  
会計年度任用職員 野内 光平  
地域おこし協力隊 橋本 真由

の荒廃がある中で生息数が増加傾向にあり、東北地方に再分布しています。

町内では10年ほど前からイノシシによる被害が出ています。

— 野内さんと橋本さんの普段の業務内容は？

野内

主にサルを追ひ払いするため、町内の巡回を行っています。畑作業をしている人や現場で出会った人からは「サルの様子はどうだい？」「最近こんな被害があつたんだよ」などと声を掛けてもらっています。町民の皆さんと情報交換をしながら対策を練っています。

橋本

私は毎日サル監視の巡回をしています。サルに発信機を付けてその発信源を探り、サルの行動範囲を探っています。サルの居場所が集落に近いときには追ひ払いをしています。

今年の4月から地域おこし協力隊として猪苗代町で活動を始

橋本

町民の皆さんと会話をしながら、どんなことで困っているのかを聞きたいと思っています。どうやって被害を防ぐかを考えながら集落ぐるみでできる対策を一緒に考えたいです。

野内

被害を防ぐための方法はあつて、さまざまな方法が確立されつつあります。ただ、それを実行するためには人的なパワーが必要で、人数も必要になります。困ったことがあれば、近所の人や私たちに相談してください。それを踏まえて私たちにできること、皆さんにお願いしなければならぬことをすり合わせて、具体的な対策を一緒に考えていければと思います。

飯田

町民の皆さんには、今後も電気柵の設置や追ひ払いなどの被害対策にご協力をお願いしたいです。その上で、必要に応じて有害鳥獣駆除隊に出動を要請するなどして駆除を行います。

町民の皆さんが主体となつて、人間も動物も住みやすい環境を整備することが大切です。今後も官民連携で共生に向けた取り組みを続けていきたいです。

めたんですが、町民の皆さんからよく聞くのはサルによる被害についてです。「農作物を植えたばかりなのに引き抜かれて困る」などの声が寄せられています。自主的に追ひ払いをしてくれている人たちもいますし、電気柵を設置している人もいますが、それでも被害が出ていて大変なことだなと感じています。

— 有害鳥獣対策業務に携わって感じることは？

野内

大学生の時、サルの被害が出ていた地域で研究をしていました。その時と比べると猪苗代町は地域の人たちと行政の距離感が近いと感じています。まず、専門の職員がいるということ自体が大きなメリットだと思います。また、他の自治体では捕獲することが主な対策方法であることが多いのですが、猪苗代町では捕獲以外の取り組みに力を

野内 光平 (のうち こうへい)  
山形大学農学部卒。大学では  
野生動物管理を専攻

入れているところが特徴だと思います。被害が出たからとりあえず捕獲するのではなく、例えば電気柵で防いだり、集落周辺の見晴らしをよくして集落に入つてこないようなすみわけをしたりしています。そういう部分を町民の皆さんが理解してくれて一緒に取り組んでいると感じています。

飯田

10年前、町内に電気柵を設置している場所はありませんでした。現在は個人で設置しているところも含めて200ヶ所以上に設置されています。町民の皆さんの地道な努力の結果だと思います。

橋本

学生の時に有害鳥獣対策に関するある講習会に参加したことがあります。その時に猟友会の人々が講師となつて「有害鳥獣対策の今後」をテーマにした講演がありました。有害鳥獣から農作物を守るために、最終的には猟友会の人々が銃で撃つて数を減らすしか方法はない、という内容でした。その後、猪苗代町のサルの調査会に参加したんですが、「全部駆除するわけじゃない」という話を聞いたんです。対策方針の違いに驚きました。

終わりに

町では農林課に専門職員を配置し、有害鳥獣対策に関する専門的な技術指導や助言、巡回の強化を図ってきました。

被害を発生させる野生動物の生態を知り、効果のある対策を実施することでさまざまな被害を減少させることができます。

また、被害当事者だけでなく幅広い世代の人たちが被害の現状や課題を理解し、地域全体で被害対策に取り組むことが大切です。

しかし、未だに町内での被害は甚大であり、今後も継続して対策に取り組んでいく必要があります。町では、今後も町民の皆さんと共にさまざまな対策を行い、人間と野生動物が共生できる町づくりに取り組んでいきます。

有害鳥獣に関する問い合わせ先

農林課 農林整備係  
☎(62) 21116

橋本 真由 (はしもと まゆ)  
千葉県出身。学生時代には哺乳類全般を学ぶ

— 被害を減らすために町民の皆さんに伝えたいことは？

町民の皆さんと話していると、「人口減少や高齢化で対策が難しい」ということをよく耳にします。私は、このような状況だからこそ、人が住むところと動物が住むところのすみわけができるようにする必要があると思います。

次の世代の人たちが住みやすい地域を作っていくために、今私たちが住んでいる町がどのような現状にあるのかを知ることが大切だと思います。農林業に携わっていない人たちにも自分の生活に係る問題の一つとして考えていただきたいと思います。